

Mrs. Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* の構造分析

大野龍浩

- I. 序
- II. 伝記執筆の経緯
- III. 作品内容の分析
 - A. 三つの基軸
 - B. 「第2巻第13章」の分析
- IV. 作品構造の分析
- V. 結

I. 序

Mrs. Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (1857) の主題を探ることは、比較的容易である。作者自身が、折りに触れて書いた書簡の中で、執筆意図（主題）を繰り返し述べているからである。即ち、「Charlotte を弁護するために書く」と。（作品の主題を指摘した批評は数多く、①「Charlotte の女らしさを強調すること」(Fraser, *TBs* 268-69, 353; Hopkins 198), ②「Charlotte が “coarse” (不道徳) でないことを訴えること」(Bick 135; Easson, *EG* 150; Hopkins 198; McVeagh 25; Stoneman 39; Uglow, intro. xii), ③「Charlotte の優れた人格を描くこと」(Bick 129-30; Bonaparte 243; Brodetsky 79; Chadwick 242; Colloms 2; Duthie 137; Easson, *EGCH* 390; Fraser *TBs* x, 491; Ganz 187; Gérin, *CB* 574; Lansbury, *EG: NSC* 155; Mcveagh

25, 29; Pollard 146; Shelston 36), ④「Charlotte の聖人ぶりを示すこと」(Bick 118, 119; Chadwick 242; Easson, *EG* 148, 155; Easson, *EGCH* 380; Pollard 159), ⑤「Charlotte が、創作活動よりも、家庭の仕事を優先し、しかも、その義務をいかに忠実に果たしたかを描くこと」(Duthie 129; Rubenius 59-60; Spencer 17-18, 71) など、拾い上げれば切りがないが、いずれの場合も、「作品は“coarse”でも、作者はそうではないことを、世間に訴える」(Gérin, *EG* 164, 194; Gérin, intro. vii; Spencer 69) という意味で、「Charlotte 弁護」を主題とする、と一括してよいであろう。

では、その主題ないし執筆意図は、作品の内容と構造にどのように反映されているだろうか。この問題を明らかにすることを、本稿の目的にしたい。

手順としては、まず、Charlotte との交流の中で綴られた Mrs. Gaskell の書簡から、執筆意図と執筆方針に関わる言及を拾い上げ、「作者が、自分の意図を、どのような方針で、具体的に作品に盛り込んで行こうとしたのか」を探る。

次に、そのような方針に基づいて描かれた作品の内容を分析・整理することによって、「書簡で明らかにした執筆目的と方針が、どのように作品に生かされているか」を検証する。

最後に、作者の主な登場人物への言及回数を図表化することにより、予め意図された主題が、予め意図された方針に基づいて、どのように作品構造に反映されたか、具体的に点検する。

II. 伝記執筆の経緯

伝記成立にまつわる諸事情については、Easson, *EG* 126-58; Gérin, *EG* 159-78, 189-201; Hopkins 158-99; Sanders 77-103; SHB iv 186-246; Shorter 1-26; 山脇 183-278 等に詳しく跡付けられているから、細部についてはそちらを参照して戴くことにして、ここでは、「執筆意図と執筆方針に関わる言及」に絞って、執筆過程を整理しておく（「表1 The Life of Charlotte Brontë 執筆の経緯」を参照されたい）。

表1 *The Life of Charlotte Brontë* 執筆の経緯

日付	宛名	摘要	典拠
1855. 3. 31		Charlotte Brontë の死	LCB 524
5. 31	George Smith	初めて伝記執筆の意図を漏らす	Letters 345
6. 4	George Smith	「個人的な回想録を書いておきたい」	Letters 348
6. 6		E. N. から Mr. Nicholls へ手紙	SHB iv 189
6. 16		Mr. Brontë の執筆依頼	SHB iv 190
7. 23		Haworth 訪問	SHB iv 191
10. 末	George Smith	「一卷分位の資料は集まった」	Letters 372
12. 20	Ellen Nussey	「まだ一行も書いていない」	Letters 876
1856. 1. 7	Ellen Nussey	「ほぼ構想がまとまった」	Letters 878
2. 22	Ellen Nussey	「20頁ほど書いた」	Letters 878
5. 6	Marianne Gaskell	「今夜, Brussels に発つ」	Letters 880
7. 9	Ellen Nussey	「20頁進んだ」	Letters 395
7. 23		Sir J. K-S. と共に, Haworth 訪問	Gérin EG 172
8. 19	George Smith	「半分位まで進んだ」	Letters 404
8. 22	L. Wheelwright	「Brussels 留学時代を書き始めた」	Letters 404-05
9. 8	Emily Shaen	「9月29日完成は無理」	Letters 410
9. 11	(by M. G.) E. N.	「1846年の記述に入った」	Letters 882
9. 30	George Smith	「過労で倒れた」	Letters 415
Autumn	Emelyn Story (?)	「来年2月末には完成させたい」	Letters 416
10. 2	George Smith	「これまでに300頁書いている」	Letters 417
12. 26	George Smith	「前作の倍以上の労力をかけた」	Letters 430
1857. 1. 初	W. W. or E. Story	「残り200頁, 明日印刷開始」	Letters 434
1. 12		Ellen Nussey の来訪	Letters 438
2. 7	L. Wheelwright	「今日脱稿した」	Letters 439
2. 13		ローマへ出発	Letters 445
3. 25 or 27		初版の出版	Gérin EG 189
5. 9		第二版の出版広告出る	Uglow intro. 18
5. 28		ローマから戻る	Letters 452
8. 22		第三版の出版	Gérin EG 200

Mrs. Gaskell が、初めて Charlotte の伝記執筆の意図を漏らした手紙は、Charlotte が亡くなった日 (1855 年 3 月 31 日) から二カ月後の 5 月 31 日、Smith & Elder 出版社の社長 George Smith に出した手紙である。該当箇所を引用する。

“Sometimes, it may be years hence—but if I live enough, and no one is living whom such a publication would hurt, I will publish that I know of her, and make the world (if I am but strong enough in expression) honour the woman as much as they have admired the writer.” (*Letters* 345)

この箇所は、批評家たちによって何度も引用されている (例えば, Duthie 105; Ganz 187; Uglow, *EG* 390; Wright 149) が、ここで、「“the writer”としての Charlotte と同じように、“the woman”としての彼女も、世間に賞賛させたい」という意志が述べられていることに注目しておきたい(a) (“[it] is Charlotte Brontë the suffering woman rather than Currer Bell the successful author who had attracted Mrs. Gaskell’s attention from the start” (Shelston 24))。同年 6 月 4 日、同じく George Smith に宛てて出した手紙には、「この夏の休暇中に、記憶が薄れないうちに、Charlotte のことを思い出す限り書き留めておこうと決意した」旨伝え (*Letters* 347), 更に、「Charlotte の個人的な回想録を書いておきたい」という意図を、次のように明らかにしている。

“I thought that I would simply write down my own personal recollections of her, from the time we first met at Sir J. K. Shuttleworth’s, telling what was right & fitting of what she told me of her past life, and here & there copying out characteristic extracts from her letters. I could describe the wild bleakness of Haworth & speaking of the love & honour in which she was held there.” (*Letters* 348)

この引用の中で、Mrs. Gaskell が、Charlotte の個人的な思い出を書く際に、“I could describe the wild bleakness of Haworth” と書いていることを、覚えておいて載きたい(b)。この二日後の6月6日、Charlotte の親友 Ellen Nussey が、Charlotte の夫 Mr. Nicholls (「Mr. Brontë 宛」と Ganz が書いている (279) のは誤解) に、「Charlotte の伝記を書いてくれるよう Mrs. Gaskell に依頼してはどうか」との手紙を書き (“Will you ask Mrs. Gaskell to undertake this just and honorable defence?” (SHB iv 189)), それから十日後の16日には、Mr. Brontë が、伝記の執筆を依頼する手紙を、Mrs. Gaskell に出している (“You seem to be the best qualified for doing what I wish should be done” (SHB iv 190))。

もともと、自分なりの “personal recollections of Charlotte” を書く気でいた Mrs. Gaskell は、“most unexpectedly” (*Letters* 349) にこの手紙を受け取り、更に二日後の6月18日、George Smith 宛に、「厳粛かつ精一杯に、この義務を果たしたい」旨の手紙を送っている (*Letters* 349-50) (“It was with a real sense of duty to her subject that she undertook the task” (Chadwick 223))。同じ手紙の中で、Mrs. Gaskell は、Mr. Brontë からの依頼を引き受けるにしても、“I shall have now to omit a good deal of detail as to her home, and the circumstances, which must have had so much to do in forming her character” (*Letters* 349). と言っている(c)。

同年7月23日には、早速 Haworth へ出かけ、Mr. Brontë と Mr. Nicholls に会っている。翌日の7月24日付け Ellen Nussey 宛の手紙には、「Charlotte の作品を賞賛する人たちは、“the circumstances which made her what she was” を知りたいと思うでしょう」 (*Letters* 361; SHB iv 192) と書いている(d)。

それ以降精力的に取材を続けながら、8月23日には、“I want *every particular* I can collect, not necessarily for publication, but to trust to my honour and discretion, and to enable me to form a picture of her character, & a drama of her life in my own mind.” と、執筆の熱意を語り、更に、“I want to know all I can respecting the character of the population she lived amongst,

—the character of the individuals amongst whom she was known” (*Letters* 369). と、彼女を育んだ住民について知りたいと語っている。つまり、このことは、Mrs. Gaskell が、伝記執筆開始当初から、Charlotte の人格形成において、Haworth がいかに大きな意味を持っているか、把握していたことを意味する (e)。

9月6日には、Charlotte の手紙を送ってくれた Ellen Nussey に対して、「Charlotte は、自分の成すべき義務を懸命に果たす、堅固な意志の持ち主である」(“she was one to study the path of duty well, and, having ascertained what it was right to do, to follow out her idea strictly.”) という読後感を得たと告げている (*Letters* 871)(f)。同じ手紙の一節 “I am sure the more fully she, Charlotte Brontë—the friend the daughter the sister the wife is known—and known where need be in her own words—the more highly will she be appreciated” (*Letters* 871). では、「Charlotte 自身の言葉で、Charlotte の人生を描く」という執筆方針が明言されている (この一節も、よく批評家に引用される。例えば、Uglow, intro. xv. また、Mrs. Gaskell がこの方針で執筆していることを指摘した批評は数多く、Chadwick 221, 223; “spectator narrator” Duthie 108, 189; Eifrig 71; Haldane 166; “Everywhere respect is shown for primary documents” (Hopkins 199); Lansbury, *EG: NSC* 136; McVeagh 25, 27; Sanders 92; Wright 151. が例として挙げられる) (g)。10月末の George Smith 宛手紙には、「大分資料が集まって、一卷分位にはなる」と進捗状況を報告している (*Letters* 372) が、12月20日の時点では、まだ一行も書いていない (*Letters* 876)。

翌1856年1月7日には、「ほぼ構想がまとまった」と Ellen Nussey に宛てて書き (*Letters* 878)、2月22日には、同じく Ellen Nussey に、「二十頁ほど書いた」と告げている (*Letters* 878)。3月15日には友人の Harriet Anderson に宛てて、“I have to be accurate and keep to facts; a most difficult thing for a writer of fiction” (Chapple, *GSJ* 70). と、「事実を忠実に記録しなければならない」と考えていることを伝えている。4月29日に、“I was & am very anxious

to do it thoroughly well, as anything about her ought to be done” (*Letters* 387). と伝記に賭ける熱意を語り、5月6日には、「今夜 Brussels に発つ」と、ロンドンから、娘の Marianne に宛てて書き、Charlotte の留学時代の様子を取材するため、大陸に渡っている (*Letters* 880)。

執筆中の同年7月9日付け Ellen Nussey 宛手紙では、“I am convinced the more her character and talents are known the more thoroughly will both be admired and revered” (*Letters* 395). と、「伝記の中心が、Charlotte の人格描写であること」を示唆し(h)、「昨日は雨だったので、執筆に集中出来、二十頁進んだ」と進捗状況を述べている。続けて、“truth and the desire of doing justice to her compelled me to state the domestic peculiarities of her childhood, which (as in all cases) contributed so much to make her what she was” (*Letters* 396; SHB iv 203). と書き、「幼少時の家庭環境を描くことが Charlotte 理解に不可欠である」という考えを吐露している(i)。

7月23日には、文人で友人の Sir James Kay-Shuttleworth と共に Haworth を訪れ、渋る Mr. Nicholls から、*The Professor* と *Emma*、及び初期作品の原稿を、借り出している (Gérin, *EG* 172; *Letters* 398-99, 882)。8月1日付け George Smith 宛の手紙では、*The Professor* には、Brussels 時代の教師 Mr. Heger への Charlotte の恋情が露骨に描かれているのではないかと危惧し (*Letters* 401)(j)、8月13日の同人宛の手紙には、「その危惧は杞憂であったから、出版に反対する理由がなくなった」と述べている (*Letters* 403)(k)。この二通の手紙は、Charlotte が世間から「不道德な女」と見なされることを恐れる Mrs. Gaskell の気持ちを、如実に表わしている。

同年8月19日付け George Smith 宛の手紙には、「半分ほど進んだと思う。残りは、手紙を写すだけだから、それほど時間はかからないと思う」と進み具合を報告し、慎重に手紙を取捨選択して抜粋してはいるが、“her language, where it can be used, is so powerful & living, that it would be a shame not to express everything that can be, in her own words” (*Letters* 404-05). であると述べ、「Charlotte 自身に語らせる」という方針を取った理由を、間接的に

説明している(1)。8月22日には、「Brussels 留学の部分を書き始めたところ」(第1巻第11章)と、Charlotte の Brussels 時代の友人 Laetitia Wheelwright に書き送っている (*Letters* 405-06)。

同年9月8日の友人 Emily Shaen 宛手紙では、「*The Professor* は、*“disfigured by more coarseness, — & profanity in quoting texts of Scripture disagreeably than in any of her other works”* だから、あまり評価しない」と述べ、作者が、Charlotte の “coarseness” に対して敏感になっている姿勢が、垣間見える(m)。続けて、「Michaelmas (9月29日)迄に完成させることは恐らく無理」と言い、更に、「新資料が見つかったので、Charlotte の十二歳頃の記述を、四十頁分書き直した」ことと「夏季休暇中に、百二十頁書いた」ことを報告している (*Letters* 410-11; SHB iv 207-10)。9月11日には、1846年の記述(第1巻第14章；「表2 *The Life of Charlotte Brontë* の構成」を参照されたし)に入り (*Letters* 882)、その後、過労で倒れてから (*Letters* 415)、同年秋には、「来年の二月末までには完成させたい」と述べ、“in her case more visibly than in most her circumstances made her faults, while her virtues were her own” (*Letters* 416; SHB iv 211). と、執筆方針の基幹に関わる重要な発言をしている(n)。

10月2日には、George Smith に宛て、「Mr. Nicholls には、*The Professor* をもっと更訂して欲しかった。何故なら “I would not, if I could help it, have another syllable that could be called coarse to be associated with her name.” だから」と述べている (*Letters* 417)。これも、執筆方針の基幹に関わる発言である(o)。その後続く、“leaving all authorship on one side, her character as a woman was unusual to the point of being unique.” という文は、「作家としての Charlotte ではなく、女性としての Charlotte に、関心を寄せていること」を、Mrs. Gaskell が告白したものである(p)。更にその後には、“I have written upwards of 300 of *my* (foolscap) pages, and I am just ending the year 1845 [第1巻第14章]. The next nine or ten years [1846-55年。Charlotte は、30-38歳。ほぼ第2巻全章に当たる] will be very interesting. I have got such

表 2 *The Life of Charlotte Brontë* の構成

章	Charlotte に関する主な事柄	頁数 (頁)	該 当 年 代	年 齢
Vol. I				
I	Haworth の陰鬱さ	7(53-59)		
II	the Brontës を育んだ環境 (Yorkshire) の特徴	17(60-76)		
III	父・母・幼年時代	19(77-95)	1777. 3. 17-1821	0-5
IV	Cowan Bridge School での辛酸な体験	14(96-109)	1822-1825. 夏	6-9
V	幼少期の作品	14(110-23)	1825. 秋-30. 6. 22	9-14
VI	Miss Wooler's School at Roe Head での幸福な日々	19(124-42)	1831	15
VII	Haworth での思索に暮れる日々	15(143-57)	1832-35. 7. 6	16-19
VIII	作家志望・governess の辛さ	38(158-95)	1835. 7. 29-39. 12. 21	19-23
IX	姉妹の絆の強さ・governess の職を探す	14(196-209)	1840	23-24
X	二度目の家庭教師・学校経営の実現へ向けて	14(210-23)	1841. 3-42. 1. 20	24-25
XI	充実した Brussels life	26(224-49)	1842	25-26
XII	孤独な Brussels life	20(250-69)	1843. 1-44. 1	26-27
XIII	潰えた自活の夢・自由の希求・Branwell の墮落	15(270-84)	1844. 春-1845	28-29
XIV	詩集の出版と不評	13(285-97)	1845. 秋-46. 秋	29-30
Vol. II				
I	<i>Jane Eyre</i> 執筆開始・Haworth での単調な日々	11(301-11)	1846. 夏-46. 12	30
II	<i>Jane Eyre</i> の成功・Branwell と Emily の死	47(312-58)	1847-48	30-32
III	Anne の死	19(359-77)	1849. 1-49. 7. 14	32-33
IV	<i>Shirley</i> 出版・London 行き	17(378-94)	1849. 8-49. 12	33
V	Haworth での孤独な日々	12(395-406)	1850. 1-50. 3	33
VI	孤独に耐える・文人との交わり・父娘の絆	10(407-16)	1850. 4-50. 8	34
VII	Mrs. Gaskell と初対面	8(417-24)	1850. 8. 19-50. 9	34
VIII	<i>Wuthering Heights</i> と <i>Agnes Grey</i> 出版 (第二版)	11(425-35)	1850. 9. 29-50. 12. 8	34
IX	London と Manchester への旅・Thackeray の講演拝聴	17(437-53)	1850. 12-51. 7. 8	34-35
X	Haworth での孤独な日々	23(454-76)	1851. 7-52. 5. 11	35-36
XI	<i>Villette</i> 脱稿	13(477-89)	1852. 6-52. 12. 6	36
XII	London 行き・二度目の Mrs. Gaskell 宅訪問	14(490-503)	1853. 1-53. 4	36
XIII	Mrs. Gaskell 初の Haworth 訪問・結婚・信仰心	21(504-24)	1853. 5-55. 3. 31	37-38
XIV	葬儀の様子と Charlotte への賛辞	2(525-26)	1855. 4	

◆頁数(頁)は、Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. London: Penguin Books, 1975. による。

good materials.”と言っている。最後に、Branwell を破滅させた Lady Scott (Mrs. Robinson) に対して、訴訟を起こしたい旨、述べている (*Letters* 418)。

11月15日の George Smith 宛書簡には、“I am *most* careful to put nothing in from Miss Brontë’s letters that can in any way implicate others” (*Letters* 421). と、伝記執筆の難しさを語っている。

12月26日の同人宛書簡では、“a piece of womanliness (as opposed to the common ideas of her being a ‘strong-minded emancipated’ woman) which I should like to bring out” (*Letters* 430) と、Charlotte をどのような女性に描こうとしているのか、自分の意図を明言している(9)。同じ手紙で、「伝記執筆に賭けた労力は、*North and South* (1855) の時の二倍以上」と述べているが、これは報酬を求めるためのものとは言え、伝記執筆に賭けた Mrs. Gaskell の意気込みが伝わってくる発言である。

12月29日の同人宛書簡では、「Lady Scott への非難が過ぎるのでは」と忠告されたことに対して、“you were a friend of Miss Brontë’s, & must be as anxious as I am to place her where she ought to be” (*Letters* 432). と反論している。この反論は、伝記の目的が、“to place Charlotte where she ought to be”であることを裏付ける発言である(1)。

年が明けて、1857年1月には、「まだ二百頁は書かなければならないのに、出版社では、明日から印刷が始まる」(*Letters* 434) と言い、1月12日には、Ellen Nussey が原稿を読み、Plymouth Grove を訪ねて来、19日には、「原稿を読んで、Charlotte の生涯と性格が正確に記されていると、Ellen Nussey が誉めてくれた」旨、Smith & Elder 社の編集顧問 W. S. Williams に書き送っている (*Letters* 439; SHB iv 211)。

2月7日に、遂に脱稿 (*Letters* 443; SHB iv 214)。同月13日にはローマ旅行に出発している (*Letters* 445)。3月25日には、初版が出版され (Gérin, *EG* 189) (Uglow は、27日と言っている (*EG* 424; intro. xviii)), 5月9日には、第二版の出版広告が出る (Uglow, intro. xviii)。

5月28日にローマから戻り (*Letters* 452, 453), 6月1日には、R. S. Oldham

牧師に向けて「Emily には、“something terrific” という印象を持っている」と言い、「伝記執筆は、自分に課された義務であると考えていた」と告白している (*Letters* 448-49)。

6月6日の Charles Kingsley 宛の返事には、“I tried hard to write the truth” (*Letters* 453). と書いている。これは、伝記の記述に不満を持って、自分を提訴しようとしている Mr. Carus Wilson に対する弁明として、自己の信念を語ったものである。同月16日の Ellen Nussey 宛の手紙には、“I did so try to tell the truth, & I believe now I hit as near the truth as any one could do. And I weighed every line with all my whole power & heart, so that every line should go to its great purpose of making her known & valued, as one who had gone through such a terrible life with a brave & faithful heart” (*Letters* 454). と書き、①真実を書こうとしたこと、②目的達成のため、一字一句に注意を払ったこと、を明らかにし、③その目的は、「Charlotte が、勇敢にかつ信仰に堅く立って、試練を耐え通したことを描写することである」と、宣言している(s)。「真実を書こうとした」という弁明は、同年7月16日、Haworth の文具店店主 John Greenwood に宛てた手紙にも繰り返されている (“I feel I have tried my utmost to write the Life as truthfully as it has been in my power to do” (*Letters* 460))。

諸方面からの苦情により、第二版の販売は見合わされ、初版を改訂した第三版が、8月22日に出版された (Gérin, *EG* 200)。

翌1858年1月28日、Mary Taylor が、Ellen Nussey に手紙を送り、“Libellous or not, the first edition was all true” (SHB iv 229). と述べて、「真実を書いた」という Mrs. Gaskell の主張を弁護している。

以上、執筆目的と執筆方針に関わる言及部分を、Mrs. Gaskell の書簡から拾い上げて、伝記執筆の経緯を辿ってきた。その結果分かったことは、次の通りである。

① 伝記執筆の目的は、三つに要約出来る。即ち、

- ① “the writer”としてのCharlotteよりも，“the woman”としてのCharlotteを描くこと (Hopkins 162) ((a)(p)(q))
- ② Charlotteの優れた人格を描くこと ((f)(h)(r)(s))
- ③ Charlotteが“coarse”ではないことを訴えること ((j)(k)(m)(o))

である。

この目的を達成するために、作者が用いた執筆方針は、

- ① Charlotteの人生を、「環境」を基に描くこと ((b)(c)(d)(e)(i)(n))
- ② 出来るだけCharlotte自身の言葉を利用し、自分は陰に隠れること ((g)(1))

の、二点である。

つまり、本章の要点を一言で言えば、「Mrs. Gaskellが、書簡を通して語っている伝記執筆の意図は、『Charlotteの人格の高潔さを世間に訴える』という目的を、『作品の不道徳性を彼女が育った環境に帰する』という方法を用いて、果たすことである」ということになる（“I should like to tell you a good deal about Miss Brontë—& her wild sad life... and after all she is so much better, & more faithful than her books.”と、SpencerがMrs. Gaskellの未公開の手紙の一節を紹介しているが(69)、これは、伝記の主題を作者自ら要約したものである、と言えよう）。

Ⅲ．作品内容の分析

「Charlotteが育った環境を記録することで、彼女を弁護する」という執筆方針が、具体的にどのように作品に生かされているのか。本章では、二段階に分けて、このことを探ってみたいと思う。

A. 三つの基軸

作品内容を分析するに当たり、内容の基軸となっていると考えられる三項目

に添って、作品の特徴を整理したいと思う。三つの基軸とは、即ち、1. Haworth の描写、2. 父との絆、3. Charlotte の美德、である。

1. Haworth の描写

伝記を初めて読んだ者は、Charlotte Brontë の伝記であるにも関わらず、終始一貫して Haworth の描写が消えないことに、驚かれるだろう（「**グラフ 各登場人物の章別頁当たり言及頻度**」を参照のこと）。

Mrs. Gaskell は、Charlotte の生い立ちから語り始めるのではなく、Keighley 駅から Haworth 牧師館に至るにつれ明から暗へ変化する風景描写から説き起こす（第1巻第1章；「**表2 The Life of Charlotte Brontë の構成**」を参照のこと）。第2章で、幼年期の Brontë 姉妹を育んだ Yorkshire の土地と人間の特色を詳述し、第3章で、Patrick Brontë と Maria Branwell の結婚に至る経緯を簡潔に述べ、その章の半ばで、ようやく Charlotte の誕生を語る。

対象となる人間の伝記を、その人物を育んだ土地の描写から始めただけでなく、作者は、その後も、折に触れて Haworth の描写を取り入れる。例えば、“Haworth Parsonage is... an oblong stone house”¹⁾；“My sister Emily loved the moors” (158)；“Haworth seems such a lonely, quiet spot, buried away from the world” (266)；“Nothing happens at Haworth; nothing, at least, of a pleasant kind” (310)；“During the earlier months of this spring, Haworth was extremely unhealthy” (407)；“Oh! those high, wild, desolate moors, up above the whole world, and the very realms of silence!” (506) など、例を挙げればきりが無い。

更に、作者は、「第2巻第8章」で、牧師館を訪ねた Charlotte の友人が、Haworth の印象を詳細に述べた手紙を引用するに当たり、“[This letter] will show the impression made upon strangers by the character of the country round her [Charlotte’s] home, and other circumstances” (429). と前置きしており、「第2巻第9章」では、晩夏の Haworth Moor を描写した Charlotte の手紙を引用する際に、“I copy the following, for the sake of the few words

describing the appearance of the heathery moors in late summer” (445). と述べている。この二例は、作者が、作為的に、Haworth の描写を取り入れていることを、裏付けるものである。

また、“Wearied out by the vividness of her sorrowful recollections, she sought relief in long walks on the moors” (428). から分かるように、作者は、Charlotte が肉体的・精神的に参った時、安らぎを与えてくれるものとして Haworth を捕え (182; 183; 189; 192; 393; 394; 409), あるいは Charlotte が Haworth を離れている時ですら、“far way from their beloved home, and the dear moors beyond” (225) とか、“The strong yearning to go home came upon her” (259). という具合に、「郷愁」という形で、Haworth の描写を挿入する (224; 239; 262; 420) (Haworth は、時には安らぎの場所となり、時には苦しみ場所となる (Brodetsky 78; Hopkins 174; Lansbury, *EG*: NSC 140, 146))。

そして最後は、Charlotte が Haworth で死んだこと (524) と、Charlotte の墓を訪れる Haworth の人々を描いて (525-26), 伝記を終わらせ、正に、「Haworth から物語を始めて、Haworth で物語を閉じている」のである (Chadwick 252; Easson, *EG* 132; Pollard 152; 山脇 227)。

2. 父との絆

伝記の第二の内容的特徴としては、「Charlotte と、Mr. Brontë との絆が強調されている」ということである。

まず、Mr. Brontë の奇癖を紹介した後、作者は、その理由を “I have named these instances of eccentricity in the father because I hold the knowledge of them to be necessary for a right understanding of the life of his daughter” (90). と述べ、Mr. Brontë が Charlotte の人生に与えた影響の大きさを、読者の脳裡に刻みつける。

“[Mr. Brontë’s] precepts to this effect [distrust of others], combined with Charlotte’s lack of hope, made her always fearful of loving too much”

(153). は、父の価値観が娘に及んでいることを、明記した文である(同様の例が (111; 146; 174)にも見られる)。Charlotte は、子供の頃から父親の忠告に従順で(175)、彼女の政治への関心は、父親の教育による所が大きく(118; 120; 131)、Mr. Heger は、「Charlotte と Emily の美点は、父親の教育の賜物である」と言っている(247-48)。

Charlotte にとって、父親に孝行することは、“a sacred pious charge”(274)であり、彼女は、死ぬまでそれを怠ることはない。また、楽しみにしていた Ellen Nussey との旅行を彼女が諦めようとするのは、父の気持ちを慮ってのことであるし(193)、気の進まない“governess”の仕事を取って選ぶようとするのは、父の経済的負担を軽くするためである(208)。

Charlotte が、父の性質を受け継いでいることも、二人の絆の強さとして、忘れてはならない事項であろう。例えば、子供嫌い(“he was not naturally fond of children”(84); “Children were to them [the little Brontës] the troublesome necessities of humanity”(211); Lansbury は、“Throughout the biography Elizabeth Gaskell is at pains to emphasise that Patrick Brontë’s dislike of children was perpetuated in his own family”(EG: NSC 148).と言っている)、“stoic”なところ(166; 313)、文学好き(324)、そして、“He was an active walker, stretching away over the moors for many miles”(89); “[Drawing] and walking out with her sisters, formed the two great pleasures and relaxations of her day”(144).とあるように、the moors を好んで歩くこと、最後に、Charlotte の意志の強さや忍耐力(88; 303; 313; 401)など。

二人の絆の強さについての言及は、更に続き、Charlotte は、“I feel reluctant to leave papa for a single day”(278). と言い、Anne が死んでからは、“[When] anything ails Papa, I feel too keenly that he is the last—the only near and dear relative I have in the world”(381). という思いに駆られる。二人きりになった父と娘を、Mrs. Gaskell は、“loving each other deeply”(415)と形容し、“There is not one letter of hers which I have read, that does not contain

some mention of her father's state [of health]" (415). と述べている。Charlotte は, "[It] would be wrong to leave Papa often" (420). と, 父を気遣い, 父親を牧師館に置き去りにして結婚することは考えられず (445) (Rubenius は, "[Charlotte's] absolute obedience to her father is indeed one of the things for which Mrs. Gaskell expresses her admiration in *The Life of Charlotte Brontë*" (94). と述べている), 書評が出たら, まず最初に父親に見せたいと思う (499)。

一方, Mr. Brontë の方も, Charlotte を大切に思っている。娘の為に, 出来るだけ外出の機会を与えたいと考え ("Her father was always anxious to procure every change that was possible for her" (417)), 「Charlotte が結婚して牧師館を去ったら, 自分は何処かに下宿でも探す」と弱音を吐き (445), Charlotte に去られると困るから, 彼女の結婚には, 決まって反対する (499)。

Charlotte が病気になった時, 娘を心配する Mr. Brontë と, 病気を押して父に尽くそうとする Charlotte の様子を描写した次の引用,

"Mr. Brontë was miserably anxious about the state of his only remaining child. . . she kept out of bed, for her father's sake, and struggled in solitary patience through her worst hours." (466)

は, 二人の絆の深さを良く表している。

3. Charlotte の美德

内容上の特徴の三つ目は, 「度重なる試練と, それに耐え通す Charlotte の美德が, 繰り返し描かれている」ということである。

作者は, 第1巻第4章で, "I have quoted the word 'bright' in the account of Charlotte. I suspect that this year of 1825 was the last time it could ever be applied to her" (108). と述べることにより, 以後, 彼女の人生が苦難の連続であることを予告する。続けて, "In looking over the earlier portion [of her

letters to Ellen Nussey], I am struck afresh by the absence of hope, which formed such a strong characteristic in Charlotte. . . . In after-life, I was painfully impressed with the fact, that Miss Brontë never dared to allow herself to look forward with hope ; that she had no confidence in the future ; and I thought, when I heard of the sorrowful years she had passed through, that it had been this pressure of grief which had crushed all buoyancy of expectation out of her” (143). と述べ、Charlotte の人生観の特徴が “hopelessness” であることを提示する。

それから、作者は、時には、“I see plainly it is proved to us that there is scarcely a draught of unmingled happiness to be had in this world” (277) ; “I have endured, however, such tortures of uncertainty on this subject [Emily’s life] that, at length, I could endure it no longer” (355-56). などと、絶望的になる Charlotte を紹介しながらも、「単調な生活」(“The sedentary and monotonous nature of the life, too, was preying upon her health and spirits” (166)), 「孤独感」(“I get on here [Brussels] from day to day in a Robinson-Crusoe-like sort of way, very lonely” (255)), 「郷愁」(“sick for home she stood in tears” (129)), 「肉体の病」(“this dread of ultimate blindness” (277)), 「肉親を失う悲痛」(376-77) などに耐えて、奮闘する彼女の姿を描き続ける。

Charlotte の美德は、次のように紹介されている。

彼女は、試練を受け入れる覚悟を持ち (“[As] to disappointment, why, all must suffer disappointment at some period or other of their lives” (214)), それに立ち向かうための忍耐を厭わない (“If I mean to improve, I must strive and endure” (407)). そのために、彼女は意志の強さを備えていて (221 ; 225 ; 361), “I felt that however often I was disappointed, I had no intention of relinquishing my efforts” (211) ; “It is my nature, when left alone, to struggle on with a certain perseverance” (363). と言う。“Submission, courage, exertion, when practicable, —these seem to be the weapons with

which we must fight life's long battle" (479). は、苦難に立ち向かう彼女の勇気を示した言葉である。

彼女は、また、どんなに苦しくても、自分に課せられた義務を忠実に果たす (264; 306; 306-07; 309; 340; 345)。そういう彼女を、作者は、"She seemed to have no interest or pleasure beyond the feeling of duty" (160). という Charlotte の親友 Mary Taylor の言葉を借りて評し、また、自らは、"[The] strong feeling of Duty... lay at the foundation of Charlotte's character" (181). と述べている。

忍耐力、強固な意志、自らを犠牲にしてまでも義務を果たそうとする姿勢、に加えて、彼女は、責任感が強く (111)、善や真理を希求し (162; 221; 441)、試練の時にあっても、感謝の心を忘れない (312; 383; 498)。

彼女の、そのような美德の基になっているのは、一言で言えば、「信仰心」である。

"The right path is that which necessitates the greatest sacrifice of self-interest—which implies the greatest good to others; and this path, steadily followed, will lead, I believe, in time, to prosperity and to happiness; though it may seem, at the outset, to tend quite in a contrary direction" (296); "God has sustained me in a way that I marvel at, through such agony as I had not conceived" (357-58); "These things [her sisters' deaths] would be too much, if reason, unsupported by religion, were condemned to bear them alone" (364); "I do not know how life will pass, but I certainly do feel confidence in Him who has upheld me hitherto" (376); "I often think that this world would be the most terrible of enigmas, were it not for the firm belief that there is a world to come, where conscientious effort and patience will meet their reward" (473). などの言葉は、聖書を熟読していた彼女 (94; 162; 170; 177-78; 238) の、堅固な信仰心を表明したものである。

以上の考察から、「Haworthの描写」、「Mr. BrontëとCharlotteの絆」、そし

て「Charlotte の美德」に関する記述が、伝記全体を一貫していることがお分かり戴けたことと思う。

B. 「第2巻第13章」の分析

「第2巻第13章」を特に取り上げたのは、「Charlotte の育った環境を記録することで、彼女を弁護する」という当初の目的を、三基軸を用意することで果たそうとしていることを、作者が、この章でほのめかしているからである。

この章の内容を簡潔にまとめれば、次のようになる。

前半(504-15)：1853年9月19-22日、Mrs. Gaskell が、初めて Haworth を訪れた時の回想を基に、Charlotte のこれまでの人生を回顧する部分

後半(515-24)：Mr. Nicholls との結婚にまつわる Charlotte の幸福感を基に、作者の Charlotte 観の結論を述べる部分

では、これから、作者が執筆意図を示唆している様子を、各々の基軸に添って、検証してみよう。

1. 「Haworth の描写」について

Haworth の描写を作品にちりばめた訳を、Mrs. Gaskell は、章の前半で、次のように説明している。

I understood her life the better for seeing the place where it had been spent—where she had loved and suffered. (508)

ここで、彼女は、Haworth を初めて訪ねた1853年9月（「表3 Charlotte Brontë と Elizabeth Gaskell の相互訪問」を参照されたい）、「Charlotte の人

表3 Charlotte Brontë と Elizabeth Gaskell の相互訪問

相互訪問回数	日 時	CBの年齢	EGの年齢	対面場所	典 拠	摘 要
1	1850. 8 .19-22	34	39	Briery Close	<i>Letters</i> 128 SHB iii 139-40 Easson <i>EG</i> 130 Whitfield 32 山脇 249	
2	1851. 6 .27-30	35	40	Plymouth Grove	<i>LCB</i> 450-51 SHB iii 238 Brodetsky 68 Easson <i>EG</i> 130 Whitfield 33	
3	1853. 4 .22-27	37	42	Plymouth Grove	<i>Letters</i> 230 SHB iv 64 Chadwick 196 Brodetsky 69 Easson <i>EG</i> 131 Whitfield 44-46	
4	1853. 9 .19-22	37	42	Haworth	<i>Letters</i> 245 <i>LCB</i> 508-11 Easson <i>EG</i> 132 Haldane 145 Whitfield 47	
5	1854. 5 初めの 三・四日間	38	43	Plymouth Grove	<i>Letters</i> 337, 346 Brodetsky 69 Easson <i>EG</i> 132	
6	1855. 7 .23	dead	44	Haworth	SHB iv 191 Chadwick 222 Gérin <i>CB</i> 570 Gérin <i>EG</i> 163 Whitfield 53	with Mr. Gaskell & Catherine Winkworth
7	1856. 7 .23	dead	45	Haworth	<i>Letters</i> 400-01, 408-12 SHB iv 207-10 Gérin <i>CB</i> 579 Gérin <i>EG</i> 172 Haldane 179	with Sir James Kay- Shuttleworth
8	1860.11. 6	dead	50	Haworth	<i>Letters</i> 641 SHB iv 239 Haldane 185	with Meta

格形成に、Haworth が大きな影響を与えている、と感じた」と、告白している（この訪問が作者に与えた影響の大きさについては、多くの批評家が指摘している。例えば、“The visit provided a fund of information, on which she was later to draw extensively. It also laid the basis of Mr. Brontë’s respect for Mrs. Gaskell and his subsequent dependence on her ability as his daughter’s biographer” (Brodetsky 69); Chadwick 200, 221; Duthie 22; “The silence and calm of the simple, ordered life at the Haworth parsonage made a deep impression on the woman used to bustle and action” (Haldane 149); Hopkins 192; Uglow, *EG* 353, 445; Uglow, intro. xiv-xv)。

「Charlotte の人格を、彼女が育った環境を基にして解明する」という、作者のこの姿勢は、実は、作品中数箇所、ほのめかしてある（この姿勢について指摘する評論は少なくない。“her quest to show how much what she called Miss Brontë’s faults were the product of her environment” (Fraser, AA 353); “great emphasis is given to the part played by environment in the development of the individual” (Hopkins 170); “the possible influence of environment upon character” (Pollard 153); “Mrs. Gaskell attached to the influence of environment on character” (Sharps 167))。例えば、(a)“a right understanding of the life of my dear friend, Charlotte Brontë” のためには、彼女が幼年期を過ごした土地柄を知ることが必要だから、“I shall endeavour... to present some idea of the character of the people of Haworth, and the surrounding districts.” と、語ったり (60)、(b)“Life in an isolated village, or a lonely country-house, presents many little occurrences which sink into the mind of childhood, there to be brooded over” (120)、あるいは、(c)“The recluse life she had led, was the cause of nervous shrinking from meeting any fresh face, which lasted all her life long” (390)。などと、述べている箇所である。更に、(d)「第 2 巻第 4 章」で *Shirley* の舞台を説明するに当たり、Charlotte が通った Miss Wooler’s School の位置する West Yorkshire の土地柄を紹介した「第 1 巻第 6 章」を参照してくれるようほのめかしているが (378)、

これは、「環境」を基に Charlotte の人生を語っていることを、作者自らが漏らした言葉である。また、(e) *Jane Eyre* と *Shirley* の作者が Haworth 牧師館の娘であることを知って、West Riding 中の人々が感激したことを伝えた後、作者は、“Miss Brontë was extremely touched in the secret places of her warm heart by the way in which those who had known her from her childhood were proud and glad of her success” (397). と述べているけれども、これは、作者が「第1巻第2章」で Yorkshire の特色を詳述したことを思い起こせば、Charlotte を育んだ「土地」を基に、この伝記を書き進めようとしている作者の作為が、滲み出た文章であることが分かる。更に、(f) Charlotte を弁護して、「*Jane Eyre* に “coarseness” があるのは已むを得ない。何故なら “circumstances forced her to touch pitch” だから (496)」と言っているが、これは作者の執筆意図をかなり露骨に告白した部分である。

作者は、「第2巻第13章」の結末で、Charlotte の死を、彼女を育んだ Haworth の村人の様子と絡ませながら、次のように語っている。

Early on Saturday morning, March 31st, the solemn tolling of Haworth church-bell spoke forth the fact of her death to the villagers who had known her from a child, and whose hearts shivered within them as they thought of the two [Mr. Nicholls and Mr. Brontë] sitting desolate and alone in the old grey house. (524)

これは、Charlotte の人生を「環境」を基盤に描いた全編の終局として、また、この章が全編の要約になっていることを示すものとして、いかにもふさわしく、作者の作為を僣ばせずにはおかない締めくり方である。

作者は、このようにして、「Charlotte の人格を描く際の基盤に『環境』を用いる」という自らの意図を、作中に埋め込んでいる。

2. 「父との絆」について

Charlotte と Mr. Brontë の絆を強調した訳を解明する手掛かりは、章の前半から抜粋した、次の引用文にある。

He [Mr. Brontë] never seemed quite to have lost the feeling that Charlotte was a child to be guided and ruled, when she was present; and she herself submitted to this with a quiet docility that half amused, half astonished me. (508)

作者は、ここで、37歳にもなる Charlotte を、いつまでたっても子供と見なす Mr. Brontë と、そういう父親に従順な Charlotte の姿に、「親子の血のつながりの強さ」を深く感じている (“half astonished” したのは、そのためである。尤も、Mrs. Gaskell が “half amused, half astonished” した理由を説明するに当たって、批評家の間には若干意見の相違があるようである。Fraser は、「Mr. Brontë が、作家になった娘を、一方では誇りに思っているながら、相変わらず子供のように扱うことに、驚いた」と言っており (EG 445)、Stoneman は、「Mrs. Gaskell は、父権制に慣れていなかったため、父権を振りかざす Mr. Brontë の傲慢さに、Charlotte が黙って従うことに、驚いた」と言っている (25)。Bick も Fraser とほぼ同意見である (136))。

Mrs. Gaskell は、この後、“But when she had to leave the room, then all his pride in her genius and fame came out” (508). と続け、父親の娘思いを強調し、また、“I could not but deeply admire the patient docility which she displayed in her conduct towards her father” (511). と述べたり、“[Mr. Brontë’s great age, and failing sight] made it a paramount obligation on so dutiful a daughter as Charlotte, to devote as much time and assistance as ever in attending to his wants” (516). と言ったり、結婚後も変わらず父親への気遣いを示す Charlotte の手紙を挿入したりして (“This wish for his continued life, together with a certain solicitude for his happiness and

health, seems, I scarcely know why, even stronger in me than before I was married” (520); “[Of] course, I could not leave him” (524)), 「父と娘の血のつながりの強さ」を際立たせている。

つまり、「父との絆」を作中随所に描き込んだ訳は、「Charlotte の人格形成に、『血（遺伝）』の影響を認めたから」と、作者はここでほのめかしているのである。

以上のことから分るように、「Charlotte の人生を描く際の基軸に『血（遺伝）』を用いているから」というのが、作者が、「父娘の絆」の堅固さを作品中で強調した理由であるが、そうすることは、必然的に、育った「家庭環境」を詳述することになるから、Mrs. Gaskell は、ここでも、「Charlotte が育った環境を詳述することによって、彼女を賞賛する」という執筆方針を、作中に生かしている、と言える（Bick は、「Mrs. Gaskell が、人物や環境の奇異さを描いたのは、そうすることによって、Charlotte の人格の正常さを際立たせるためである」と言っている（117））。

Mrs. Gaskell has exhibited with great care the two ultimate factors, the hereditary and the local influences, which united in the production of Miss Brontë's remarkable mind. (Easson, *EGCH* 394)

Charlotte was what she was partly because she was the daughter of Maria Branwell and Patrick Brontë brought up in Haworth Parsonage on the Yorkshire moors. (Hopkins 199)

上記二つの引用文は、Charlotte の生涯を描くための構成上の基盤として、Mrs. Gaskell が、「遺伝」と「環境」という人格形成の二大要素を用いていることを、適確に指摘したものである。

この項を終わるに当たり、「母との絆」と「姉妹同士の絆」について考察して

おきたい。この二つが強調されていることを指摘しておくことは、『血(遺伝)』を、伝記の構成基盤にしている」ことの証拠になるからである(「血のつながり」あるいは「家庭環境」を、作者が伝記執筆の基盤にしていることについては、Gérin (EG 194)や、Wright (64)にも同様の指摘が見られる)。

まず、「母との絆」について。

作者は、「伝記の構成基盤に『血(遺伝)』を用いていること」の証拠として、Charlotte の特徴を語る前に、次のような伏線を張って、母親の特徴をぬかりなく忍ばせている。(a)Charlotte の “shyness” は、自分が “ugly” だったのが一因だが (501)、母親 Maria Branwell も、実は、“not pretty” だった (81)。(b)また、Charlotte の敬虔さは、牧師である父の感化もさることながら、母の “piety” (83) に負うところが大きく (“the deep piety to which I have alluded as a family characteristic” (80) と、作者は述べている)、(c)彼女の “patience” についても同じである (83)。(d)Charlotte は、地味な服を好むし (“modest, dainty, neat attire” (444))、花嫁衣裳も質素である (516) が、母も “always dressed with a quiet simplicity of taste” であった (81)。

また、「姉妹たちは、母を早くに亡くしたために、母親の愛情を満喫出来ず、そのことが子供嫌いにつながった」と作者が説明する場面 (210-11) や、Charlotte が、初めて見る母親の手紙を “the records of a mind whence my own sprang” (399) と呼び、“I wished that she had lived, and that I had known her” (400). と感じ入った、という場面は、「母と娘の血のつながりの強さ」を垣間見させてくれる。

次に、「姉妹同士の絆の強さ」について。

姉妹の仲の良さについては、“[The] six little creatures used to walk out, hand in hand, towards the glorious wild moors, which in after days they loved so passionately; the elder ones taking thoughtful care for the toddling wee things” (86). という場面や、夭折した姉 Maria の優しさと忍耐が、彼女を Helen Burns (Jane Eyre の親友) のモデルにするほど、いつまでも Charlotte の脳裡から離れなかったこと (140)、更に、Brussels 留学時代、Emily

は、Charlotte に頭をもたせ掛けて歩いたし(243)、二人はいつも一緒にいたこと、また、Emily について、“I think Emily seems the nearest thing to my heart in the world” (355). と語ったり、Anne を、“She has an extraordinary heroism of endurance” (309-10); “[At] heart she is, I believe, a true Christian” (364). と称賛する、Charlotte の言葉、などから察せられる。

Charlotte の妹思いは、“[What] Charlotte could have borne patiently for herself, she could not bear for her sister [Emily]” (166); “She could bear much for herself; but she could not patiently bear the sorrows of others, especially of her sisters” (217); “[Her sisters’] life and happiness were ever to Charlotte far more than her own” (218). と繰り返し言及されている。また、死を覚悟して、“[Be] a sister to her [Charlotte] in my stead” (367). と、Charlotte の親友 Ellen Nussey に頼む Anne の言葉には、姉を思う彼女の真心が込められている。

姉妹たちには、共通の性質—“grave and silent” (87); “[The three girls] were shy. . . and always preferred the solitude and freedom of the moors” (144); “their self-denying natures” (313)—があり、作者は、彼女たちの絆の強さを印象付けるために、“They were all in all to each other” (93). と言い、“[There] is nothing like it [the value of sisters’ affection] in the world” (289). という Charlotte の言葉を引用し、“[The] affection among all the three was stronger than either death or life” (178). と断言する。

Charlotte が、Emily の一周忌に、彼女の思い出に苦しんだり(395)、もう一度、妹たちの靈魂と出会うことを望んだり(401)、妹たちに先立たれた後、一人になってからも、夜中にテーブルの回りを歩きながら議論するという姉妹共通の習慣を止めなかった(166; 199; 307; 381; 508) のは、妹たちが、死後も Charlotte に影響を及ぼしている証拠である。これらの事例は、言い換えれば、それほど姉妹の絆が強いことを表している。

3. 「Charlotte の美德」について

「作者が、Charlotte を襲う幾多の試練と、それに耐え続ける彼女の美德を強調したのは何故か」についての解答の糸口は、章の後半部、遂に結婚という幸福をつかんだ Charlotte を評した、次の二文の中にある。

After a hard and long struggle—after many cares and bitter sorrows—she is tasting happiness now! (519)

We remembered her trials, and were glad in the idea that God had seen fit to wipe away the tears from her eyes. (519)

ここで、Mrs. Gaskell は、「Charlotte の信仰心が神に嘉された」と、宣言している。

つまり、「Mrs. Gaskell が、試練を辛抱強くこらえる Charlotte の姿を繰り返して描いたのは、『彼女の信仰の敬虔さ』を印象付けたかったから」であることを、ここで示唆しているのである。これは、同時に、この伝記の主題でもある。

作者は、作品中で、“If her trust in God had been less strong, she would have given way to unbounded anxiety, at many a period of her life. As we shall see, she made a great and successful effort to leave ‘her times in His hands’” (143). と述べ、「Charlotte の信仰」が主題であることを、認めている。信仰を貫き通した Charlotte を称える Mary Taylor の言葉：“All her life was but labour and pain; and she never threw down the burden for the sake of present pleasure” (526). を、作者が伝記の終章で引用したことも、このことを裏付けている。

実は、「第2巻第13章」には、作品の主な内容が凝縮されている。

Haworth 訪問の回想部分で、作者は、Keighley 駅から Haworth に至る風景や、Charlotte が語った自分の過去を簡潔に紹介しているが (505-08)、これ

は、それまで伝記の中で語って来たことの総括である。また、彼女が自分の宗教観を作者に述べた部分の、“[She] said she was trying to school herself against ever anticipating any pleasure; that it was better to be brave and submit faithfully; there was some good reason, which we should know in time, why sorrow and disappointment were to be the lot of some on earth” (510). という叙述は、これまでに語った Charlotte の人生の波瀾万丈さを彷彿とさせてくれる。

更に、挿入された “[If] there be a true man’s heart in his breast, he can bear, submit, wait patiently” (513). という Charlotte の手紙の一節は、彼女の人間観を吐露したものであり、“My life is, indeed, very uniform and retired... yet, I find reason for often-renewed feelings of gratitude, in the sort of support which still comes and cheers me on from time to time” (514); “She expressed herself in other letters, as thankful to One who had guided her through much difficulty and much distress and perplexity of mind” (516). は、神の与えた試練に勝利した者でなければ言えない「信仰心の深さ」を伝えた文章である。

Mr. Nicholls との結婚について、神へ感謝する気持ちを認めた Charlotte の言葉 “My life is different from what it used to be. May God make me thankful for it! I have a good, kind, attached husband; and every day my own attachment to him grows stronger” (521). には、彼女が悲観的な結婚観を抱き続けて来たこと (184; 192; 204; “[It] is an imbecility, which I reject with contempt, for women, who have neither fortune nor beauty, to make marriage the principal object of their wishes and hopes, and the aim of all their actions” (254); 278; 290; 445) を振り返る時、「数多くの試練に耐え通した者にのみ与えられる喜びの大きさ」や、「信仰を持ち続けることの大切さ」が込められており、作品の主題を想起させられずにはいられないものがある。

本章で述べたことを整理すると、次のようになる。

まず、「A. 三つの基軸」において、作品に一貫して描かれているものが三つあることを指摘した。即ち、「Haworth の描写」「父との絆」「Charlotte の美德」である。

次に、「B. 『第2巻第13章』の分析」において、作者が三基軸を用意したのは、「環境を記述することで Charlotte を弁護する」という当初の目的を果たすためであり、その意図をほのめかしている、という意味で、「第2巻第13章」が作品分析の鍵になる、ということを示した。

「三基軸を用いて、執筆意図を、どのように説明しているか」という問題については、次のように解答することが出来る。

- (1) 作者は、「Charlotte の人格形成の源は、環境と遺伝にある」と考えており、そのために、彼女が育った土地（「Haworth の描写」）や、家族のつながり（「父との絆」）、を強調する必要があった。
- (2) 作者は、「Charlotte の優れた人間性を世間に訴えること」を執筆の目的としており、そのために、彼女の苦難と信仰心（「Charlotte の美德」）を繰り返し描く必要があった。

（“Gaskell’s careful descriptions of the dismal, apparently comfortless Yorkshire landscape, the grim Parsonage, Charlotte’s eccentric father... create more than an appropriately vivid backdrop for the *Life*” (Bick 114); “There is recognition of the importance of environment, especially early environment, as a conditioning factor in determining Charlotte’s outlook on life” (Hopkins 199); “No matter where she went or what she saw, Charlotte Brontë’s standards were drawn from Haworth and her family” (Lansbury, *EG*: NSC 133); “her very mind had been shaped by that place... Haworth was like a well from which she drew the water of her inspiration, and the well in which she ultimately drowned” (Lansbury, *EG*: NSC 141). という四つの引用文を、上記(1)と(2)の見解を裏付ける証拠として、本章の最後に挙げておく。）

IV. 作品構造の分析

The Life of Charlotte Brontë の中で描かれる対象を、言及が多い順に並べると、①Charlotte が他を凌駕して一位である。これは当然にしても、以下、②Anne, ③Emily, と続く。ここまでは、大方の読者も予想がつかれるであろうが、では、四番目となると、何が来るか、想像がつかれるだろうか。実は、④Mr. Brontë が来る。更にその次は何かお分かりになるだろうか。⑤Haworth である（詳細は、「表 4 *The Life of Charlotte Brontë* における登場人物の章別言及頻度」及び「表 5 *The Life of Charlotte Brontë* における登場人物の章別頁当たり言及頻度」を参照されたい）。

これまでに説明してきたように、Mrs. Gaskell は、「Charlotte を弁護する」という明確な意図を、「彼女が育った環境を詳述する」という方法でもって、作品に描き込んでいる。では、その方針は、作品構造に、どのように反映されているだろうか。

この問題を調べるために、筆者は、各登場人物が作品中にどの程度言及されているか、を点検してみることにした。その結果が、「表 4 *The Life of Charlotte Brontë* における登場人物の章別言及頻度」と「表 5 *The Life of Charlotte Brontë* における登場人物の章別頁当たり言及頻度」である。

「表 4」は、作品における、各登場人物への言及回数を、その人物の名前、その人物を指す代名詞等を基に、章毎に累計したものである。

「表 5」は、その結果を、更に、各章の頁数で割り、各登場人物の一頁当たりの言及頻度を求めたものである。

そして、「グラフ 各登場人物の章別頁当たり言及頻度」は、「表 5」で得られた結果を、グラフ化したものである。

この三つの図表を、「作者の執筆方針がどのように反映されているか」という観点から分析すると、次のようなことが分かる。

(1) Charlotte の伝記であるから、彼女への言及が圧倒的に多いことは当然にしても、その次に言及回数が多いグループは、Mr. Brontë, Emily, Anne, の

表4 *The Life of Charlotte Brontë*における登場人物の章別言及頻度

◆この表は、Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. London: Penguin Books, 1975. における、各登場人物への言及回数を、固有名詞、代名詞等を基に、章毎に累計したものである。

Volume	I															II															小計	総計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	小計	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	小計		
Patrick Brontë	10	5	240	17	38	21	41	68	29	16	62	25	62	11	645	80	118	48	30	36	48	21	19	19	27	21	26	80	3	576	1,221	
Maria (wife)	3	3	155	2	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	165	0	0	0	0	19	0	0	1	0	1	0	1	0	1	23	188	
Maria (daughter)	4	1	102	75	4	7	1	4	0	0	1	0	0	0	199	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	3	202	
Elizabeth	4	1	79	36	0	7	1	4	0	0	1	0	0	0	133	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	135	
Charlotte	5	9	98	76	128	243	254	243	393	323	447	276	282	3,755	262	922	322	493	271	240	181	246	394	502	306	337	492	33	5,001	8,756		
Patrick Branwell	5	1	78	3	74	8	51	49	93	9	11	4	27	575	7	53	6	4	5	0	1	2	2	8	2	7	1	1	99	674		
Emily Jane	6	5	82	29	71	7	69	157	48	56	235	61	35	99	960	41	250	31	20	12	16	4	30	4	17	3	1	8	1	438	1,398	
Anne	6	4	83	4	71	6	61	114	52	83	21	3	25	92	625	41	275	357	9	11	14	3	11	3	7	11	1	1	1	745	1,370	
Miss Branwell	0	0	8	31	8	7	5	25	28	24	13	1	0	0	150	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	153	
Tabby	0	0	0	0	46	0	4	43	1	1	0	18	0	2	115	14	7	1	16	1	7	0	0	7	3	2	0	5	1	64	179	
Haworth & its surroundings	28	125	46	13	18	14	29	58	14	7	15	24	29	8	428	10	52	9	12	34	25	13	28	18	15	4	12	62	6	300	728	
Elizabeth Gaskell	4	34	39	32	14	20	21	32	16	5	24	10	17	12	280	15	43	14	16	8	2	40	20	13	66	6	69	104	13	429	709	

Mrs. Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* の構造分析

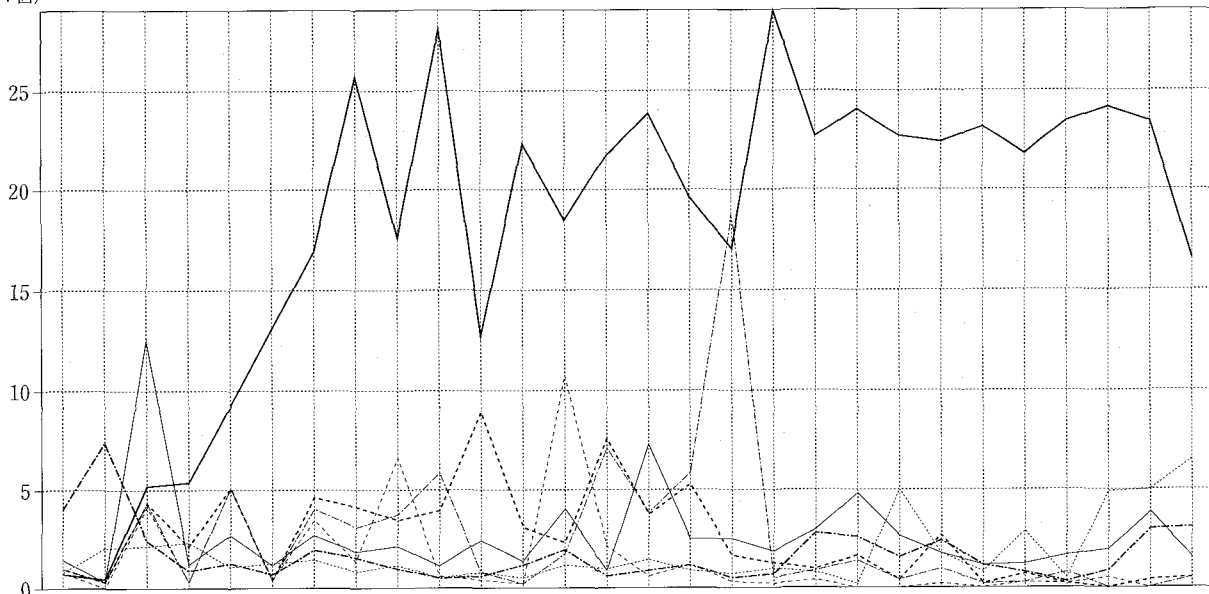
表5 *The Life of Charlotte Brontë* における登場人物の章別頁当たり言及頻度

◆この表は、Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. London: Penguin Books, 1975. における、各登場人物への言及回数を、固有名詞・代名詞等を基に、章毎に累計したものを、各章の頁数で割り、各登場人物の1頁当たりの言及頻度を求めたものである。

Volume	I														II														総平均		
	Chapter	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	平均	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		13	14
Pages	7	17	19	14	14	19	15	38	14	14	26	20	15	13	17.5	11	47	19	17	12	10	8	11	17	23	13	14	21	2	16.1	16.8
Patrick Brontë	1.4	12.6		2.7	2.7		2.7		2.1	2.4		4.1		2.5	7.3	2.5	1.8	3.0	2.6		1.1	1.6		3.8		2.7	2.6				
Maria (wife)	0.4	8.2	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	1.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.5	0.2	
Maria (daughter)	0.6	5.4	5.4	0.3	0.1	0.4	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	
Elizabeth	0.6	4.2	2.6	0.0	0.1	0.4	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	
Charlotte	0.7	5.2	5.4	9.1	16.9	12.8	16.9	17.4	12.4	28.0	12.4	18.4		14.0	23.8	19.6	16.9	22.6	22.6	23.2	23.5	23.4		22.4	21.8	24.1	16.5	22.4			
Patrick Branwell	0.7	4.1	0.2	5.3	3.4	0.4	3.4	6.6	0.4	1.3	0.6	10.8	2.1	2.6	0.6	1.1	0.3	0.2	0.4	0.0	0.1	0.1	0.2	0.3	0.5	0.5	0.3				
Emily Jane	0.9	4.3	2.1	5.1	4.6	0.4	4.1	3.4	9.0	4.0	3.1	2.3	7.6	3.7	3.7	5.3	1.6	1.2	1.0	1.6	0.5	2.7	0.2	0.7	0.2	0.1	0.4	0.5	1.4		
Anne	0.9	4.4	0.3	5.1	4.1	0.3	3.0	3.7	0.8	5.9	0.2	1.7	7.1	2.7	3.7	5.9	18.8	0.5	0.9	1.4	0.4	1.0	0.2	0.3	0.1	0.0	0.5	2.5			
Miss Branwell	0.0	0.4	2.2	0.6	0.3	0.4	0.7	2.0	0.5	1.7	0.1	0.0	0.0	0.6	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.1			
Tabby	0.0	0.0	0.0	3.3	0.3	0.0	1.1	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.2	0.4	1.3	0.1	0.1	0.1	0.0	0.7	0.0	0.4	0.1	0.2	0.0	0.2	0.5	0.3			
Haworth & its surroundings	4.0	2.4	0.9	1.3	1.9	0.7	1.5	1.0	0.6	0.5	1.2	1.9	0.6	1.9	0.9	1.1	0.5	0.7	2.8	1.6	2.5	1.1	0.7	0.3	0.9	3.0	1.5				
Elizabeth Gaskell	0.6	2.1	2.3	1.0	1.4	1.1	0.8	1.1	0.9	0.4	0.5	1.1	0.9	1.2	1.4	0.9	0.7	0.9	0.7	5.0	0.2	1.8	0.8	2.9	0.5	5.0	6.5	2.3			

グラフ 各登場人物の章別頁当たり言及頻度

(単位: 回)



登場人物	I-1	I-2	I-3	I-4	I-5	I-6	I-7	I-8	I-9	I-10	I-11	I-12	I-13	I-14	II-1	II-2	II-3	II-4	II-5	II-6	II-7	II-8	II-9	II-10	II-11	II-12	II-13	II-14
— ブロンテ姉	1.4	0.3	12.6	1.2	2.7	1.1	2.7	1.8	2.1	1.1	2.4	1.3	4.1	0.8	7.3	2.5	2.5	1.8	0.3	4.8	2.6	1.7	1.1	1.2	1.6	1.9	3.8	1.5
— シャーロット	0.7	0.5	5.2	5.4	9.1	12.8	16.9	25.7	17.4	28.0	12.4	22.4	18.4	21.7	23.8	19.6	16.9	29.0	22.6	24.0	22.6	22.4	23.2	21.8	23.5	24.1	23.4	16.5
--- プランウェル	0.7	0.1	4.1	0.2	5.3	0.4	3.4	1.3	6.6	0.6	0.4	0.2	10.8	2.1	0.6	1.1	0.3	0.2	0.4	0.0	0.1	0.2	0.1	0.3	0.2	0.5	0.0	0.5
--- エミリ	0.9	0.3	4.3	2.1	5.1	0.4	4.6	4.1	3.4	4.0	9.0	3.1	2.3	7.6	3.7	5.3	1.6	1.2	1.0	1.6	0.5	2.7	0.2	0.7	0.2	0.1	0.4	0.5
— ア ン	0.9	0.2	4.4	0.3	5.1	0.3	4.1	3.0	3.7	5.9	0.8	0.2	1.7	7.1	3.7	5.9	18.8	0.5	0.9	1.4	0.4	1.0	0.2	0.3	0.8	0.1	0.0	0.5
--- ハワース	4.0	7.4	2.4	0.9	1.3	0.7	1.9	1.5	1.0	0.5	0.6	1.2	1.9	0.6	0.9	1.1	0.5	0.7	2.8	2.5	1.6	2.5	1.1	0.7	0.3	0.9	3.0	3.0
--- ギヤスケル	0.6	2.0	2.1	2.3	1.0	1.1	1.4	0.8	1.1	0.4	0.9	0.5	1.1	0.9	1.4	0.9	0.7	0.9	0.7	0.2	5.0	1.8	0.8	2.9	0.5	4.9	5.0	6.5

三人である（「表 5」の「総平均」欄を参照）。これは、Charlotte の「家庭環境」を詳述した結果であるから、この点では、執筆方針が、作品構造に反映されている、と言えよう。

- (2) 上記第 2 位グループの顔ぶれを見て気づくことは、意外と、Mr. Brontë への言及が多いということである。これは、「父との絆」を強調することにより、「家庭環境（血のつながり）」が Charlotte に与えた影響の大きさと、「父への従順」という彼女の「美德」を読者に伝えんとした結果であるから、この点においても、執筆方針は、作品構造に反映されている、と言える。
- (3) 第 3 位に来るのは、Branwell, Haworth, Mrs. Gaskell の三人（「Haworth」も、便宜上、登場人物の一人として考えた）であるから、Haworth への言及が結構多い（逆の言い方をすれば、Brontë 家の一員であるはずの Branwell への言及が意外と少ない）（「表 5」の「総平均」欄を参照）。これも、Charlotte の人格形成における「環境」の影響を強調した結果であるから、同様に、執筆意図が投影されている、と言える。
- (4) Haworth への言及は、最初から最後まで、途絶えることがない（「表 4」「表 5」および「グラフ」の、「Haworth」の欄参照）。このことは、執筆意図が如実に反映された結果である。
- (5) Mrs. Gaskell が第 3 位グループにいることを、どう考えるか。「出来るだけ Charlotte に自らを語らせ、作者自身は陰に隠れる」という執筆方針を顧みる時、作品構造は、その方針を反映していると見るか、あるいは、方針は無視されている、と見るか（「表 5」の「総平均」欄を参照）。「グラフ」を参照して戴ければ、分かるように、Mrs. Gaskell への言及回数が増えるのは、①「第 2 巻第 7 章」、②「第 2 巻第 12 章」、③「第 2 巻第 13 章」、そして④「第 2 巻第 14 章」の四回である。言及が増えた理由を、「表 2 The Life of Charlotte Brontë の構成」で確認して戴くと、それぞれ、①Charlotte が Mrs. Gaskell と初対面する場面だから、②Charlotte が Mrs. Gaskell 宅を訪問する場面だから、③自分が初めて Haworth を訪ねた時の印象を綴った章である上、全編の内容の凝縮を試みた章だから、④最後に、伝記に込めた思いを語った章だ

から (Wright は、「語り手として名乗り出たから」と言っている (151)), ということになる。これ以外の章では、言及回数は極端に少なくなるから、「陰に隠れる」という方針は守られていると考えていいのではないだろうか。

V. 結

本稿は、Mrs. Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (1857) における、主題と構造の有機的関連性の有無を検証したものである。

まず、「I. 序」で、本稿の目的は、「主題（執筆意図）が、作品の内容と構造にどのように反映されているか、を解明すること」である、と述べた。

次に、「II. 伝記執筆の経緯」では、作者の執筆目的と執筆方針を探るために、作者の書簡を基に、伝記執筆の経緯を辿った。その結果、作者は、「Charlotte の作品の不道德性は、彼女が育った環境に因るものであり、彼女自身は、非常に高潔な人格の持ち主である、ということ、出来るだけ彼女自身の言葉を用いて、世間に訴えること」を意図に、執筆していることが明らかになった。

続いて、「III. 作品内容の分析」では、前章で明らかになった執筆方針が、具体的に作品内容にどのように生かされているのか、「第2巻第13章」の意味に注目しながら、探った。

そして、「IV. 作品構造の分析」では、「主な登場人物は、どれくらいの頻度で言及されているか」を図表化することにより、上記の執筆方針が、作品構造にどのように反映されているか、を点検した。

以上の考察の結果、結論として言えることは、「Mrs. Gaskell の執筆意図は、忠実に、作品内容と構造に反映されており、従って、この作品は、作品の主題と内容と構造とが有機的に絡み合った、完成度の高い作品である」ということになる。

最後に、「伝記が不可避免的に帯びる虚構性」について触れておきたい。

伝記について、あたかも小説であるかのように、その主題と構造の有機的関

連性を探ろうとする試みは、無意味であるという考えもあるだろう。

しかし、伝記は、限り無く事実に近い、虚構である。伝記作家は、収集した事実を整理し、取捨選択するから、彼が描き得るのは、彼独自の視点から見た人物像に過ぎない。つまり、彼は、事実を基に、彼自身の解釈による人物を創造することになる (Alexander 114; “In so many biographies the subject becomes a projection of the author’s own imagination or wishful thinking” (Lansbury, *EG* 79); “Facts remains facts, but their arrangement and interpretation are the biographer’s responsibility” (Lansbury, *EG* 81))。ここに、伝記が虚構性を帯びる理由がある。

The Life of Charlotte Brontë の虚構性に言及した論稿は、実は、少なくない。その幾つかを紹介することによって、本稿を締めくくりたいと思う。

- (a) まず、「Charlotte 弁護」という執筆方針に合致しないことを理由に、作者が、「Charlotte の Mr. Heger への恋情」に触れなかった点を指摘したもの——Bonaparte 237; Brodetsky 77; Fraser, *TBs* 489; Gérin, *EG* 170; Gérin, intro. ix-x; McVeagh 30-31; “To have revealed anything of this... would have ruined Gaskell’s defence of her friend as truly womanly writer” (Spencer 73); “Part of her mission was to defend Brontë against the accusations of sensuality levelled at her novels: the story of her starved love must not be told. The biography, supposedly so devoted to showing Charlotte’s inner life and ‘the circumstances which made her what she was,’ thus involved a suppression which matched Charlotte’s own” (Uglow, *EG* 339); Uglow, intro. xvii; Whitfield 157.
- (b) 「Charlotte の称賛」という目的を優先したために、「Charlotte の欠点」を省略するという作為が入ったことを指摘したもの——“Intent on protecting Charlotte from the least taint of that passion and rebelliousness... Gaskell depicts Charlotte... as an exemplar of conventional female virtue” (Bick 112); Fraser, *AA* 345; Ganz 187-88; Gérin, *EG* 165; Spencer 74; Whitfield 54, 156.

- (c) Charlotte の初期作品について詳述しなかったのも、目的を優先したことによる、としたもの——Bick 127-28.(初期作品に詳しく立ち入らなかった訳について、作者自身は、“They give one the idea of creative power carried to the verge of insanity” (*Letters* 398). と説明している。)
- (d) 牧師補 William Weightman への憧れや Smith & Elder 社社員 James Taylor の求婚を省略した点を指摘したもの——Bick 119, 121-22; Gérin, *CB* 574.
- (e) Charlotte のオリジナルの手紙の変更や選択について指摘したもの——Eifrig 71; Ganz 188, 190, 281-82; Wright 153.
- (f) 遺族に配慮したために、真相を隠さざるを得なかった点（このことは、実は、Mrs. Gaskell 自身が J. S. Mill への手紙の中で認めている (*Letters* 568)) を指摘したもの——Allot 33; Bonaparte 236; Hopkins 176.
- (g) その他、虚構性を指摘したもの——“Her modifications of the facts of Charlotte’s life were made with the utmost tact and at the instigation of her own sensitive delicacy” (McVeagh 33); “instinctive fictionalization” (Shelston 25-26).
- (h) 作品中の小説的技巧を指摘したもの——Bonaparte 250; “Many of the qualities which characterise Mrs. Gaskell’s work as a novelist are evident in the biography” (Brodetsky 71); “Mrs. Gaskell uses the device of ‘flash-back’ to build up interest as sympathy for her heroine” (Colloms 8-9); “She exercises the novelist’s skill in analysing the phenomena of Charlotte’s moods and actions” (Holdane 175); Lansbury, *EG: NSC* 154, 209-20; Stephen 417-19; Uglow, *EG* 256; Wright 240.

従って、伝記をあたかも虚構の如く論じることは、あながち無意味なことではないのである。

Note

1) Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (London: Penguin, 1975) 85. 以降、引照頁数は丸括弧に含め、本文中に挿入する。

Works Consulted

- Alexander, Christine. Rev. of *A Life of Anne Brontë*, by Edward Chitham. *Nineteenth-Century Literature* 48.1 (1993): 108-15.
- Allott, Miriam. *Elizabeth Gaskell*. Harlow: Longman, 1960.
- Bick, Suzann. *Towards A Female Bildungsroman: The Protagonist in the Works of Elizabeth Gaskell*. Diss. U California, 1978. Ann Arbor: UMI, 1991. 7904378.
- Bill, Barbara. *William Gaskell 1805-84: A Portrait*. Manchester: Manchester Literary and Philosophical Publications, 1984.
- Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. Charlottesville: UP of Virginia, 1992.
- Brodetsky, Tessa. *Elizabeth Gaskell*. Leamington Spa: Berg, 1986.
- Chadwick, Ellis H. *Mrs. Gaskell: Haunts, Homes, and Stories*. London: Sir Isaac Pitman & Sons, 1913.
- Chapple, J. A. V., and Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 1966.
- Chapple, J. A. V. "Two Unpublished Gaskell Letters from Burrow Hall, Lancashire." *The Gaskell Society Journal* 6 (1992): 67-72.
- . "A Sense of Place: Elizabeth Gaskell and the Brontës." Annual Address. *Brontë Society Transactions* (1992): 313-28.
- Colloms, Brenda. "Thoughts on Mrs. Gaskell's *Life of Charlotte Brontë*." *The Gaskell Society Newsletter* 13 (1992): 2-9.
- Duthie, Enid L. *The Themes of Elizabeth Gaskell*. London: Macmillan, 1980.
- Easson, Angus. *Elizabeth Gaskell*. London: RKP, 1979.
- , ed. *Elizabeth Gaskell: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1991.
- Eifrig, Gail McGrew. *Growing out of Motherhood: The Changing Role of the Narrator in the Works of Elizabeth Gaskell*. Diss. Bryn Mawr College, 1982. Ann Arbor:

- UMI, 1985. 8322274.
- Ffrench, Yvonne. *Mrs. Gaskell*. London: Home & Van Thal, 1949.
- Fraser, Rebecca. *The Brontës: Charlotte Brontë and Her Family*. New York: Crown, 1988.
- . “A Strange Plant: Charlotte Brontë’s Friendship with Mrs. Gaskell.” Annual Address. *Brontë Society Transactions* (1989): 341-54.
- Ganz, Margaret. *Elizabeth Gaskell: The Artist in Conflict*. New York: Twayne, 1969.
- Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. London: Penguin, 1975.
- Gérin, Winifred. *Charlotte Brontë: The Evolution of Genius*. Oxford: Oxford UP, 1967.
- . Introduction. *The Life of Charlotte Brontë*. By Elizabeth Gaskell. London: Dent, 1971. v-xii.
- . *Elizabeth Gaskell: A Biography*. Oxford: Oxford UP, 1976.
- Glynn, Jenifer. *Prince of Publishers: A Biography of the Great Victorian Publisher George Smith*. London: Allison & Busby, 1986.
- Haldane, Elizabeth. *Mrs. Gaskell and Her Friends*. London: Hodder and Stoughton, 1930.
- Hopewell, Donald. “Two Literary Ladies: Mrs. Gaskell and Miss Brontë.” Annual Address. *Brontë Society Transactions* (1956): 3-9.
- Hopkins, A. B. *Elizabeth Gaskell: Her Life and Work*. London: John Lehmann, 1952.
- Lane, Margaret. “Charlotte Brontë and Elizabeth Gaskell: The Fruitful Friendship.” Annual Address. *Brontë Society Transactions* 17.4 (1979): 261-71.
- Lansbury, Coral. *Elizabeth Gaskell: The Novel of Social Crisis*. London: Paul Elek, 1975.
- . *Elizabeth Gaskell*. Boston: Twayne, 1984.
- McVeagh, John. *Elizabeth Gaskell*. London: RKP, 1970.
- Payne, George A. *Mrs. Gaskell and Knutsford*. Manchester: Clarkson & Griffiths, 1900.
- . *Mrs. Gaskell: A Brief Biography*. Manchester: Sherratt & Hughes, 1929.
- . “Charlotte Brontë’s Biographer.” Annual Address. *Brontë Society Transactions* (1930): 227-37.

- Pollard, Arthur. *Mrs. Gaskell : Novelist and Biographer*. Cambridge, MA : Harvard UP, 1965.
- Rubenius, Aina. *The Woman Question in Mrs. Gaskell's Life and Works*. Uppsala : Almqvist & Wiksells Boktryckeri AB, 1950.
- Sanders, G. D. *Elizabeth Gaskell*. 1929. New York : Russell & Russell, 1971.
- Sharps, John Geoffrey. *Mrs. Gaskell's Observation and Invention : A Study of Her Non-Biographic Works*. Frontwell, Sussex : Linden Press, 1970.
- Sheiston, Alan. Introduction. *The Life of Charlotte Brontë*. By Elizabeth Gaskell. London : Penguin, 1975. 9-37.
- Shorter, Clement. K. *Charlotte Brontë and Her Circle*. 1896. Westport, CT : Greenwood, 1970.
- Spencer, Jane. *Elizabeth Gaskell*. London : Macmillan, 1993.
- Stephen, Jamez Fitsjames. "On *The Life of Charlotte Brontë*." Easson, *EGCH* 414-19.
- Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Brighton : The Harvester Press, 1987.
- Tillotson, Kathleen. *Novels of the Eighteen-forties*. 1954. London : Oxford UP, 1956.
- Uglow, Jenny. Introduction. *The Life of Charlotte Brontë*. By Elizabeth Gaskell. London : Dent, 1992. xi-xxi.
- . *Elizabeth Gaskell : A Habit of Stories*. London : faber and faber, 1993.
- Usworth, Anna. "Mrs. Gaskell and Charlotte Brontë." *The Gaskell Society Newsletter* 8 (1989) 17-18.
- Wise, Thomas James, and John Alexander Symington, eds. *The Brontës : Their Lives, Friendships and Correspondence*. The Shakespeare Head Brontë. 4 vols. 1931. London : Anthony Rowe, 1989.
- Whitefield, A. Stanton. *Mrs. Gaskell : Her Life and Work*. London : George Routledge & Sons, 1929.
- Woolf, Virginia. "Haworth, November, 1904." *The Essays of Virginia Woolf : 1904-1912*. Ed. Andrew McNeillie. London : The Hogarth Press, 1986. 5-9.
- Wright, Edgar. *Mrs. Gaskell : The Basis for Reassessment*. London : Oxford UP, 1965.
- 山脇百合子 『エリザベス・ギヤスケル研究』 東京 : 北星堂, 1976.